

美術関連資料のアーカイブ構築と活用

2022 年度活動報告

井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究

「井上隆雄写真資料に基づいたアーカイブの実践研究」（通称：井上隆雄写真資料アーカイブ研究）では、昨年度に引き続いて、京都市立芸術大学特別研究助成を受け「井上隆雄撮影の仏教壁画のアーカイブ実践による仏教美術研究ネットワークの構築」という課題で研究を遂行している。昨年度に報告した通り、井上隆雄写真のうち、インド・ラダックおよびビルマ（現ミャンマー）・バガンのポジフィルムに対して、DiPLAS [1] から整理分類、デジタル化、データベース化の支援を受けている。この支援は、2017～2020 年度までの芸資研重点プロジェクトで実施したアーカイブ実践の成果を基盤に、原資料保存と利活用の利便性の向上を目的としている。写真資料は、井上隆雄のアトリエから旧崇仁小へ、さらに旧淳風小へと移動を繰り返している。荷造りしたままの密封ケース、紙箱に収納されたビルマ関連の写真資料に対する DiPLAS の支援内容は、①ポジフィルムの現状記録、②ポジフィルムの番号付け、③マウントや袋に井上隆雄が記載していたメモ等の文字起こし、④ 上記の情報を集約したエクセルリストの作成、⑤ポジフィルムのデジタル化、⑥コンタクトシートの作成、⑦ポジフィルムの整理収納、である。これによって、原資料の保存形態、およびデジタル画像データやエクセルリスト等の管理環境が格段に改善された。引き続き、デジタルデータベースの検索システム登録を DiPLAS の後継プロジェクト X-DiPLAS [2] の支援を受けて進行中である。最終的には、ラダック撮影画像 1707 枚、ビルマ撮影画像 4679 枚を登録する予定で、このデータベール川雄三氏、石山俊氏、島貫直子氏のご尽力による。事細かに相談、連絡、確認をいただき、これまでのアーカイブ作業の状況把握とともに、より良い資料保存の形を目指したデータベース作成を進めることができた。関係者の方々に心よりの感謝を申し上げる。

「仏教美術研究ネットワークの構築」という研究課題に対しては、これまで 3 回の研究会を実施した。デジタル化した壁画写真の表現内容を菊谷竜太氏（インド密教学・高野山大学）、寺井淳一氏（バガン研究・東京外国語大学）、翟建群氏（画家・本学日本画専攻）らと検証した際に、壁画の色についての関心が寄せられた。ポジフィルムの劣化傾向に対応したデジタル画像の色調補正が可能かどうか。途方もない作業量の予感はあるが、民博の情報課の奥村泰之氏、カメラマンの増田大輔氏のご教示を得て、井上隆雄写真資料アーカイブ研究の研究員 岡田真輝氏が色調補正の試行を続けている。2021-22 年にポジフィルムをデジタル化した複製画像で色調補正を試行した結果、いくつかの傾向と対策を見出した。井上隆雄写真アーカイブ研究メンバーの色へのこだわりは、DiPLAS に採用された案件の中では特異的なことと認知されたようである。X-DiPLAS に引き継がれた井上隆雄写真資料は、色調補正、データベースに掲載する情報入力作業などを次年度以降に進めていく。

また、末森薫氏、寺井淳一氏、翟建群氏、筆者はラダックの仏教寺院壁画調査を計画した。国際間の移動が徐々に再開されていたが、インド政府が中国籍者に対してビザ発給を停止していたため、翟建群氏の渡航は諦めざるを得なかった。ワクチン接種証明の運用、出入国ルールが頻繁に変更されることに加えて、インド考古局 (ASI) のオンライン申請システムの不具合で、事前許可を得ることができない等、諸々の気がある渡航となった。現地では大学発行の身分証明と推薦書での取材交渉という運びとなったが、現地協力者 Skarma Gurmet 氏 (JULAYLADAKH 代表) の尽力で、多くの仏教壁画の取材を実施することができた。調査最終日には National Museum Institute において Dr. Anupa Pande (Department of History of Art) が主催する International workshop “Buddhist Mural Painting of Asia:Interface with India”で我々3 名が各専門領域と今回の調査について講演を行った。その様子は現地新聞 DAINIK JAGARAN に取り上げられた (2022 年 9 月 29 日掲載記事)。

一連の活動については、2023 年 3 月 12 日に民博で開催するシンポジウム「写真家 井上隆雄の視座を継ぐー仏教壁画デジタルライブラリと芸術実践ー」で報告する予定である。デジタル化作業と並行して「写真家・井上隆雄」の人物像を知るために、本学卒業生のひろいのぶこ氏 (本学名誉教授)、吉本忍氏 (民博名誉教授) にインタビューを実施した。井上隆雄と京都芸大探検部創立のつながり、民族学の研究者との協働、民博との関係が浮き彫りになってきた。この点については、準備を整え、次年度に深めていきたい。

正垣雅子

森村泰昌アーカイブ

京都市立芸術大学の 2023 年夏の移転を控え、2009 年より預かって整理してきた森村泰昌関連文献資料（2000 年まで）を一旦、モリムラ@ミュージアムへ移動する作業を行った。データベースは引き続き公開活用し、また随時追加訂正も行ってゆく予定である。また、現在は各資料に仮の番号札をはさんでいる状態で、これも将来的活用を考えると、ラベルを貼るなどして閲覧用とし、資料コーナーに置くことも検討されている。本文献資料は該当頁だけでなく、雑誌書籍等がそのまま収集されているため、1980 年代後半以降の日本の現代美術の動向や受容を考える上でも貴重な資料群であり、2000 年以降の資料群についても、同様に追加整理を行って更なる活用が目指される。

加須屋明子

[1] 新学術領域研究（研究領域提案型）『学術研究支援基盤形成』研究基盤リソース支援プログラム「地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化」（JP 16H06281）による「地域研究画像デジタルライブラリ（DiPLAS）」が 2016 年度から 2021 年度まで実施された。

[2] 人間文化研究機構の共創先導プロジェクト（共創促進研究）である「学術知デジタルライブラリの構築」の一環として、国立民族学博物館が拠点となって 2022 年度から進めている。



井上隆雄写真資料 DiPLAS による整理後の様子

沓掛音高の総合芸術専攻部屋 2022 年 12 月撮影：正垣雅子



森村泰昌関連資料

モリムラ@ミュージアム倉庫 2022 年 12 月撮影：大村邦男